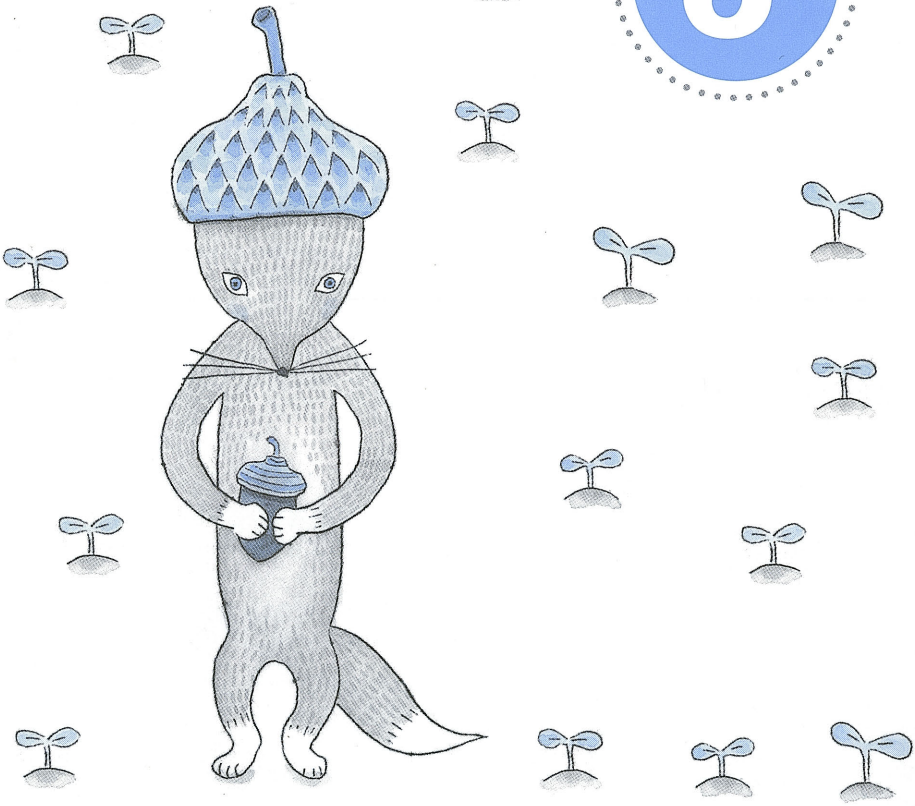
幼児の教育　第103巻　第6号　平成16年6月1日(毎月1回発行)昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2004

6



第１０３巻　第６号　日本幼稚園協会

好評発売中

行事別保育のアイデアシリーズ

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ

やまもとかつひこ 監修／関西あそび工房 著

行事別保育のアイデアシリーズ ①
元気がいっぱい
夏期保育

夏は、子どもたちにとって魅力いっぱいの季節。保育者のかかわり方一つで、夏の魅力がどんどんふくらんで、子どもたちの育ちがもっともっと豊かなものになります。
本書は、保育者の発想を広げ、豊かな“夏期保育”を展開していくための「遊びのレシピ集」です。

AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

ワークショップりんごの木 著

行事別保育のアイデアシリーズ ②
みんなにこにこ
運動会

「ふだんの子どもの遊びを運動会種目につなげたい」「見ている人も楽しめるものにしたい」「いつもの種目をもっともっとおもしろくするためには」など、保育者と子どもたちの工夫が生かされた運動会の新しいアイデアを多数提供。子どもも保護者もうれしい、新しい運動会のヒント集です。

AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

小林紀子 編著

行事別保育のアイデアシリーズ ③
心を伝える
入園式・卒園式

どんな入園式・卒園式が、子どもたちや保護者にとって魅力的なのでしょうか。本書は、さまざまな保育の場で行われている「入園式」「卒園式」にスポットをあてて紹介。独自の「入園式」「卒園式」を工夫するためのヒントとなります。

AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

行事別保育のアイデアシリーズ ④
みんなでつくろう
発表会

花輪　充　著

AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

行事別保育のアイデアシリーズ ⑤
みんなわくわく
クリスマス・お正月

島本一男　著

AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第103巻　第6号

幼児の教育

――第一〇三巻　第六号――

目　次

巻頭言　「午前の保育」と「午後の保育」……無籐　隆…（4）

世界の子育て事情(2)　カナダ……福川　須美…（8）

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(2)
　基本的習慣に関する研究……松本　園子…（16）

乳児クラスの保育より(2)　一歳の誕生日……田辺　敦子…（24）

障碍をもつ幼児の保育(22)―この子と出会ったとき―
　言葉がなくても思いは通じる……津守　真・津守　房江…（28）

はれ！　ときどき・・・その③……さとう　ひろこ…（33）

© 2004
日本幼稚園協会

ある日……（34）

葉っぱの力(1)……群馬　直美…（36）

ポジティブサポートの世界(7)
　変化が起こす変化(1)……村田　愛…（43）

ブレントでの障碍児へのサポート(2)
　―ある障碍児のための学校とそのアフタースクールクラブのこと―…清原　規子…（52）

かみさまからのおくりもの……佐藤　寛子…（58）

表紙絵／藤原ヒロコ
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「涙雨」
編集委員／田代　和美・佐藤　寛子・吉岡　晶子
編集部／河合　聡子・仲　明子

巻頭言

「午前の保育」と「午後の保育」

無藤　隆

保育について新たな課題が次々に起きる。特に、預かり保育、保護者の保育参加、地域の人との連携、三歳未満児の親子への支援、あるいはまた地域の文化的素材や活動の導入等、子育て支援や地域に開かれた保育という理念の下で多様な活動が保育に含まれるようになった。そのよい点もあり、しかし、マイナスもあるように思われる。保育本来の働きを邪魔している面もあるだろう。

保育・幼児教育本来の部分の活動を主に午前中の時間の主力を担うという意味で「午前の保育」と呼んでみてはどうだろうか。それに対して、子育て支援や地域に開かれる保育を午後の時間に行われるという意味で「午後の保育」と呼んでみよう。不易の保育と流行

の保育という言い方で分けることも出来る。

「午前の保育」

本来、保育とはどうあるべきか、どうあることが可能なのかと改めて問うてみる。その最良の部分とは何か。とはいえ、保育者が保育のセンスを持って努力すれば可能なところで実現することは何か。つまりは、私が訪問し、思い浮かべられるいくつかの幼稚園の保育の様子を見てみたとき、そこで子どもは何を行っているのだろうかということである。

それを、子ども同士が協同する中でともにする目標を目指して、活動していくことと、それを保育者が助け、支えていくこととととらえることは出来ないだろうか。子どもの意図的目標志向的な協同活動を支援するのである。子どもたちが一緒に何かをしよう・達成しようとして、かなりの時間を掛けて、協力しあいながら、目標に向けて進む活動を行う。保育者はその活動を援助し、子どもたちの力で実現するように蔭の存在として助けていく。

子どもたちが邪魔をされずに、自分たちの考えで活動を進めていくのである。その目標はかなり遠くにあるものとなる。そうであって、困難に出会い、それを越えて、工夫していく意味が出てくるからである。また一人では適わないから、何人かで協力していく。さらに、子どもたちだけで可能になるとも思えないから、保育者が助力する。

幼稚園の三年間の保育は、年長児のそういった協同活動を可能にするための道筋として

とらえていくことができる。遊んでいるところから目標が生まれ、それを多少目指すという活動に転換するあたりから、その目標に向けての手順や手だてを子どもが意識して構築するようになる。さらに、長期の目標に向けていくつものステップを踏み、その都度の成果を自分たちの間で確認し、共有し、それに基づき、目標を組み替える。

ここでは、保育をいかに集中した活動、そしてその集中が持続するかということに焦点がある。数名から十数名の集団の緊密さをいかに保育者が可能にし、維持するかが問われる。

「午後の保育」

保育を保護者にまた地域に開いていく。集中した活動というより、様々なものや人との出会いを大事にしていく。地域の文化との関連を大切にして、その活動や素材や人材を保育に入れ込む。子どもの気分はリラックスしたり、家庭的な雰囲気であったり、刺激の面白さに興奮したりするだろう。いろいろなものや人や活動が可能であることに目が開かれていく。

保護者が保育参加する場合を考えてみよう。時間としては午前であっても、午後であっても、それはよいのだが。ともあれ、その保育が、子どもの集中と目標志向という意味で高いものになるはずがない。その意味では保護者の参加は邪魔になる。保育者の代わりを勤めるという訳にはいかない。多くの場合、子どもの様子をただ見ていたり、逆に手伝い

すぎたり、単に保育者の助手をすることになる。特定の子どもの親であることがかえって子どもの気を散らすこともある。しかし、そのよさもある。保護者が保育のあり方を学ぶという点とともに、子どもが様々な大人に出会う一環ともなる。

預かり保育の場合も、その保育は午前中の保育ほど密度の濃いものにはならないだろう。やや「薄目」であり、その代わり、家庭的な雰囲気を楽しんだり、異年齢の交流が豊かにあったり、地域行事や家庭の家事に類した活動をあれこれ行うことが出来る。預かり保育に参加しないで家庭に戻る子どもが体験するだろう活動に類したことを可能にしようと考えるから、そういったことに活動の趣旨は傾く。

地域の文化素材を入れ込む場合も午後の保育といった感じになっていく。子どもの力を引き出し、その新たな活動を構想し、作り出すところを育てるというより、文化素材に馴染むということが主になるからである。例えば、編み物を活動に導入するとすると、その手だてを習うということに重みが置かれる。

午前の保育と午後の保育の相互の活性化

この二つが截然と分かれるという訳ではない。相互に連動し、刺激しあい、そちらで得たことをさらにもう一方で活かすという関係が成り立つことが保育を豊かなものにする。力点がどこにあるのかにより、保育のあり方を見直す枠組みとしてみたいのである。

（お茶の水女子大学）

世界の子育て事情(2)

カナダ

福川　須美

一・「子育ては楽しい」カナダ

カナダは日本の二十七倍の国土に人口は三〇〇〇万人余りと四分の一、人々はアメリカ国境に接する南部に集中して暮らしています。国民のルーツは、ネイティヴ系、イギリス系、フランス系、その他のヨーロッパ系、東洋系等七十を超すといわれ、多種多様な文化を認め合いながら、カナダという「サラダボウルの国」あるいは「モザイクの国」を形成しています。文化も価値観も異なる人々が対等かつ平和に暮らすには、お互いの違いを

尊重し、人権を侵さない努力が必要になります。また、開拓時代からの助け合いと連帯は今も人々の生活の隅々に生きています。

ところでカナダの子育て事情や子育て家庭支援を日本に紹介したのは、故小出まみ氏ですが、その頃、日本では母親たちの育児不安や子育ての辛さが問題になっていました。彼女は出会ったカナダの母親たちが異口同音に「子育ては楽しい」と答えることに関心を持ち、なぜだろうとその理由を探究しました。その結果「地域から生まれる支え合い」があるからだということに気づいたのです。

その後、カナダの子育て支援についての関心は急速に高まり、わが国の子育て支援施策にも影響を及ぼすほどになりました。例えばカナダに普及しているドロップインという親子の居場所・親子ひろばは、「つどいの広場事業」として国の補助事業になり、中・高校生が赤ちゃんに触れ合う事業の背景にはカナダの「共感の根」教育の存在を無視できないでしょう。

二．子育ての基本理念――「誰も完璧ではない」

カナダの連邦政府が助成するノーバディズ・パーフェクト・シリーズという子育てガイドブックがありますが、冒頭には「親になるためだけに生まれてきた人はいません。親であるには誰もが助けを必要とします。完璧な親も完璧な子どももいません。最善を尽くすしかありません。親には親の人生があります。自分の時間を持つことは身勝手な後ろめたいことではありません。親自身が自分を大切にしてこそ子どもにとってよい親でいられるでしょう」という子育ての基本理念と励ましのメッセージが掲げられています。

同シリーズは「こころ」「からだ」「行動」「安全」そして「親」の五巻からなり、子育ての基本を分かりやすい絵と文章で伝え、なによりも親が自分で問題をどのような道筋で解決すればよいかを理解できるように編集されています。後述するファミリー・リソース・センター等で開催されるグループ学習で、ファシリテーター（助

言者兼促進者）とともに相互学習しながら、参加者に無料で配付されるこのシリーズを役立てるのです。日本の親にとっても、これまでにない新鮮な視点で子育てを見直すことができるシリーズです。日本語訳も出版され、活用の手引きもありますので、ぜひ繙いてみて下さるようお勧めします。日本でもファシリテーター養成が始まろうとしています。

ただし、このシリーズはカナダで子育てする親たちのものですから、そっくりまねをするのではなく、親を尊重することや支援の姿勢、考え方、方法を学びたいと思います。

子どもの親になることは、家族のライフステージとしては大変おめでたいこととされ、一般に祝福されますが、親夫婦にとって幸せな面ばかりでなく、ときには危機につながる場合もあります。近年、北米では「親への移行期」の危機的な側面に注目する研究が盛んに行われています。さまざまな面で、現代では、親になるのはそう簡単なことではないようです。わが国でも親になるための学習やサポートが必要な時代を迎えているのではないでしょうか。

三、子育て家庭を支援する
ファミリー・リソース・センター

カナダは子育て支援先進国のひとつですが、実際の子育て家庭は、なお多くの支援を必要としています。たとえば、移民してくる人々は親族の手助けもなく、知り合いもいない、言語もわからないというように社会的に孤立することが少なくありません。離婚後の母子家庭の貧困等も問題で、トロントの子どもの三分の一は貧困家庭、四分の一は単親家庭で育つといわれます。十代の妊娠出産もわが国よりはるかに多いという実情です。

むしろ助けを必要としているからこそ、心ある人々の手で様々な支援活動が紡ぎだされ、財政も厳しいなかで奮闘努力が重ねられているといえるでしょう。その支援活動の中心的な担い手が全国各地に一九七〇年代頃から誕生するファミリー・リソース・センターです。地域の

ニーズに合わせた、地域の人々による支援が、草の根のように各地に拡がっていきました。今では全国組織があり、各地の活動交流や政策への提言など活発に展開しています。

ファミリー・リソース・センターの取り組む活動は多種多様です。日本がモデルとするドロップインは多くのセンターにありますが、〇歳時の親たちでも気軽に訪れることのできる親子のひろばで、予約なしで、子連れで楽しめ、親子ともども友達づくりができます。もちろんスタッフに子育てに関するさまざまな相談をすることもできます。なかには朝食つき、昼食つきのプログラムもあり、また、母親ばかりではなく、父親向けのプログラムも用意されます。

わが国の子育て支援の内容は子どもの保育や一時預かり、育児相談、親子ひろば等、どちらかというとまだまだ母親の子育てを支援するにとどまっていますが、カナダでは子育て家庭のあらゆるニーズに対応した支援を意味します。「福祉」も「保健」も「保育」も「住宅問題」や「職業訓練」までも、あらゆる局面に及ぶ包括的な支援を実施しています。個々のニーズを支援条件や規定に合わないからと切り捨てず、あらゆる社会資源や地域ネットワークを駆使して、その家族のウエルビーイングを達成することを理想としています。難民家族への支援事例など日本では考えられないほど柔軟で、包括的な連携プレイであり、しかも家族の自立を支援するみごとなソーシャルワークです。問題を抱えた家族というレッテルを貼るのではなく、ニーズを持つ市民として処遇し「必要な支援は支援される人が決める」という徹底した「当事者主権」の姿勢でことに当たるやり方は、福祉対策の革命的な方法を提起しているのです。

その運営に当たるのはＮＰＯ、学校法人、教会など多様な団体ですが、基本的には各自治体や慈善団体・財団の助成を得て、利用者にはほとんど無料で提供されます。しかし助成金は運営費のすべてを賄うには不足しがちで、次々に生まれる地域の新しいニーズに対応するにも、常にスタッフは資金確保のためのバザーや有料プロ

グラムなどの活動に奔走しているのが実情です。助成金が切れてもニーズがあれば、ボランティアでも継続していくという熱意ある女性たちに支えられている事例にも出会いました。

四．保育ニーズへの対応

カナダでは、六歳未満の子どもを持つ母親のほぼ七割が働いています。失業率が高いことや離婚率の上昇による母子家庭の増加などで、女性の就業率は全体平均でも七十パーセントに達します。カナダでは日本のような全国同一の最低基準に基づく認可保育所が全国に展開しているわけではありません。各州によって保育政策にはバラツキがあります。

ファミリー・リソース・プログラムのなかにも保育ニーズに応じる事業があります。ファミリー・リソース・プログラム全国協会では、保育ニーズについて、家族はいろいろな保育ニーズを持っており、それらに対応するには、単一の保育形態だけではむずかしく、いろいろなタイプを組み合わせて、その家族が必要とする保育を提供することが重要であるという立場をとっています。ここでも徹底して個々のニーズを尊重する姿勢です。

もちろんカナダにも働く親のために国による統一した保育政策を要求する運動があります。しかし、同全国協会は、フルタイムの共働き家族のための保育所だけではなく、もっと広く保育ニーズを捉え、フォーマル、インフォーマルを問わず、多様な保育ニーズにシームレスに応じることのできる地域づくりを目指すべきだと考えているようです。

例えば、ファミリー・リソース・プログラムが提供する保育サービスには、ナーサリースクール、ヘッドスタートや幼稚園就園準備等半日制の発達支援プログラム、乳児から学童期までをカバーする文字通りの保育、十代の親向けの特別な学習プログラム、認可の家庭型保育、保育センターが複数の保育所や家庭型保育を管理し、スタッフを支援し、資源を共有する形態、アウト

リーチや訪問型の保育サービス、一時的や短期間の保育、学校の休暇等の保育、夏のキャンプ、様々な親のためのレリーフ（手がわり）やレスパイトサービス、緊急一時保育、障害児の統合保育（専門家によるサポートつき）等々、実にバラエティに富んでいます。単に預かるサービスが沢山あるというより、子どもは親だけでなく地域ぐるみで育てるのだという姿勢が感じとれます。

表1のように、サンプル数は少ないのですが、日本人に比べて、カナダ人は他人の子どもを育てることに心理的な抵抗が低いようです。親戚となれば七十パーセントが「引き受ける」と回答しています。人種や民族が違ってもよいという回答も日本人の二倍はあります。実際、トロントの街では、肌の色の異なる親子連れの姿をちょくちょく見かけました。

ところで、日本では主として共働き家族のための「保育に欠ける」乳幼児のための保育所が全国各地に整備されています。その発展はカナダとは比較にならないほどの質量です。カナダの働く母親達は日本の保育所を羨ま

▼表1　他人の子どもを養育してみたいか（註）

		カナダ人	日本人
1　自分の子どもがいなかったら	①はい	17 (29.8)	44 (18.8)
引き受けますか	②いいえ	15 (26.3)	73 (31.2)
	③わからない	20 (35.1)	110 (47.0)
(P<.05)	N.A.	5 (8.8)	7 (3.0)
2　親類の子どもなら	①はい	40 (70.2)	78 (33.3)
引き受けますか	②いいえ	2 (3.5)	47 (20.1)
	③わからない	13 (22.8)	102 (43.6)
(P<.0002)	N.A.	2 (3.5)	7 (3.0)
3　人種・民族の違う子どもを	①はい	27 (47.4)	48 (20.5)
引き受けますか	②いいえ	7 (12.3)	56 (23.9)
	③わからない	20 (35.1)	124 (53.0)
(P<.005)	N.A.	3 (5.3)	6 (2.6)
合　計		57 (100.0)	234 (100.0)

しいといいます。しかし、児童福祉施設として「保育に欠ける」場合のみ入所できるというように利用者を絞りこんできました。したがってフルタイム以外の保育ニーズや家庭の子育てを支援するという発想は、エンゼルプラン登場までほとんどありませんでした。

カナダでは、連邦政府や州政府の保育政策、資金援助の程度などの差異を反映して、ファミリー・リソース・プログラムが提供する保育サービスの内容も違っています。オンタリオ州では一九八一年に「保育サポートセンター」というパイロットプロジェクトに資金援助が行われ、ブリティッシュ・コロンビア州では、連邦政府の戦略に基づいて、保育サービスとファミリー・リソース・プログラムとが様々な方法で、もっと接近し、統合されるに至りました。しかし両者が互いに分離独立したままの州も多く、働く親支援のための保育と家庭にいる親の子育て支援に分かれているため、競合してしまい、実際、ケベック州では一九九七年、就労支援の保育は予算増されたが、子育て支援には乏しい予算しかないという

▲0〜1歳児のために区切られたスペースでゆったりすごす常連の親子（トロントのファミリー・リソース・センターのひとつ、チルドレン・プレイスで）

事態が生じたといいます。

五．おわりに

わが国では次世代育成支援対策推進法が制定され、一応、両方の施策が推進されることになっています。しかし、保育施策は雇用優先の預かり場所づくりに偏り、子どもの権利や発達保障の観点から重視すべき保育の質は骨抜きにされつつあります。親にも子どもにもやさしい地域づくりはこれからでしょう。必要な人に必要な支援が確実に届く地域社会にするために、ひとりひとりが声を挙げて、同法の下、すすめられる予定の地域計画に反映していきましょう。カナダと日本は、子育て支援が必要になった背景や実情が異なりますが、カナダの地域に根ざした柔軟な子育て家庭支援には、多くを学ぶことができるでしょう。

（駒沢女子短期大学）

註

「カナダと日本の子育て家庭調査（一九九八～一九九九）」の結果から作成。子育て家庭リソースセンター発行『人権尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て家庭システムの研究』資料Ｐ９より

参考文献

小出まみ著『地域から生まれる支え合いの子育て』ひとなる書房　一九九九

向田久美子訳・子ども家庭支援センター監修『ノーバディス・パーフェクト・シリーズ』ドメス出版　二〇〇二（なお別刊に「父親」および「活用の手引き」がある）

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(2)

基本的習慣に関する研究

松本　園子

保育者と研究者の共同研究組織、保育問題研究会（一九三六～一九四三）の活動の中で、今回はこの会で取り組まれた基本的習慣の研究を紹介し、そこから学ぶものについて考えます。前回に引き続き、拙著[1]の内容をベースに、今日的課題との関連を加えて、述べていきます。

一、基本的習慣研究の意義

◇基本的習慣とは

食事、排泄、睡眠、清潔、衣服の着脱などは、人が生きてゆくための基本的行為であり、子どもは誕生後、大人の援助を受けながら、自分の意思と力で

できるように成長していきます。これらは、「基本的習慣」あるいは「基本的生活習慣」と呼ばれています。

しかし、これらは、授乳、離乳、オムツ交換、寝かせるなど、もっぱら大人の側の育児行為として問題にされてきており、「基本的習慣」という概念で、発達と保育の問題としてとらえるようになったのは、さほど古いことではありません。それは、昭和一〇年代に開始された保育学者山下俊郎の研究および山下と保育者たちによる保育問題研究会の実践的研究によって始まりました。

◇保育における基本的生活の位置

乳幼児期は〈遊び〉と〈生活〉の時期であるといいますが、お腹が空いたり、眠くてぐずぐずしていたりして、生活の課題が満たされていない時には遊べません。生活の土台のうえに、心と身体を働かせ、成長させる遊びが成立するのです。したがって、乳幼児期の保育・育児の第一の課題は基本的生活への援助であるといっても過言ではありません。

子どもを育てる親の悩みの大部分は、基本的生活にかかわる問題です。ちゃんと食べてくれない、なかなか寝ない、眠りが浅く泣いてばかり、おむつがとれない、うんちがでない……このような場合は、子どもは機嫌が悪く、ぐずぐずと付きまとって疲れた親を悩ませます。そんな状態が高じて、育児ノイローゼに陥り、児童虐待にいたる場合もあります。

よく眠り、おなかも満足し、機嫌のいい時には、子どもは自分から遊びます。大人は、子どもの遊びに引き込まれて一緒に遊ぶ楽しいひとときがもてます。大人が遊んであげることはよいことですが、子ども自身の内部に、遊びを支える生活（生理）的満足がなければ、あの手この手で遊びの相手をしても、子どもはのってこないでしょう。

保育施設の保育においても、それは同じです。保

育者は知識と経験を持っていますから、多くの親よりは〝うまく〟やれるでしょう。また、受け持ちの何人かの子どものなかに生活がうまくいかない子どもがいても、一人の子どもと孤軍奮闘している家庭の親ほど追い詰められた状態にはならないかもしれません。

しかし、日々の保育のなかでは、生活にかかわる問題はたくさんあり、研究課題は山積みです。

◇基本的習慣研究の意義

ところが、この分野は、保育の内容として、十分に研究されてきたとはいえません。生活の世話やしつけは、長年受け継がれてきた、あまりにも当たり前のことであり、また、その分野の専門家は医師と考えられ、保育の問題として検討する必要が意識されてこなかったように思われます。

そのことが気になったのは、数年前、保育士養成課程の「乳児保育」のテキストとして、保育の実践記録集をつくった時です（松本他編著『実践・乳児の生活と保育』二〇〇一、樹村房）。その仕事の中で、私は、基本的生活に関わる保育現場の研究的取り組みが、遊びのそれに比べて手薄であると感じたのです。

私どもは、この本のために、各種の保育雑誌に掲載されている三歳未満児保育の実践記録を収集しました。この時、遊び関係の記録はたくさんあるのに、生活にかかわるものがなかなか見つからず困ったのです。結局、食事や排泄に関する保育実践記録を、何人かの知り合いの保育者に新たに書いてもらい、掲載することになりました。生活にかかわる内容は、実際には保育時間の多くを占めており、トラブルも多い部分ですが、研究会や、実践記録のテーマとしては、あまり魅力がないのかもしれません。

しかし、基本的生活の分野には、解決を必要とす

る保育の問題が無数にみられます。とりわけ、環境の激変のもとで、子どもたちの生活リズムの変化や乱れが問題になっている今日、日常的な生活の部分に、もっと光を当てて、保育の問題として研究を進めなければならないのではないでしょうか。

二、戦前期の保育における基本的生活

さて、保育問題研究会のころ、つまり戦前期の保育施設における基本的生活の位置付けはどのようなものであったでしょう。

当時の保育は、一九二六（大正一五）年に制定された「幼稚園令」に拠っていました。

幼稚園令施行規則に規定された保育項目は、遊戯、唱歌、観察、談話、手技等、であり、基本的生活にかかわる項目はありませんでした。

幼稚園の場合、保育時間は短く、家庭における育児によって基本的習慣がほぼ自立していることを前提に入園していました。お弁当の見守りや、お漏らしの始末なども時にはあったでしょうが、保育の内容として研究を要する切実性はさほど強くはなかったかもしれません。

ところが、保育所（当時は制度がなく、託児所と呼ばれることが多かった）ではそうはいきません。三歳未満の子どもも多く受け入れていましたし、朝から夕方まで長時間の保育であれば、年長児にも基本的生活にかかわるいろいろな課題が出てきます。

したがって、保育所保育の大きな部分を基本的生活への援助が占めていましたが、これについての指針はなく、それぞれの保育者が、自分の経験と判断ですすめざるをえませんでした。

こうした中で、保育問題研究会が基本的習慣を共同研究のテーマとして取り上げたことは画期的なことだったのです。

三、基本的習慣に関する山下俊郎の研究

基本的生活についての科学的研究が乏しかった時代、これに注目して研究に着手したのが山下俊郎です。

山下は基本的習慣の実態について、わが国で初めての大規模な調査に取り組みました。それは、一九三五（昭和一〇）年十一月から翌三六年一月にかけて、五六〇人余の児童（〇～七歳）を対象に実施した調査です。食事、睡眠、着衣、排泄、清潔の習慣について保育担当者（主として母親）に質問法（または質問紙法）により行われました。

山下がこのような調査、研究に取り組んだのは、食事、睡眠、排泄、着衣、清潔整頓などの基本的習慣は幼児期の児童に欠くことのできない重大な教育の一項目であるという認識からでした。欧米の児童教育に関する著書には、このような基本的習慣について、必ず相当の頁数が割かれているのに、当時のわが国の児童心理学、児童教育に関する書物では、取り上げたものはなかったということです。[2] そのため彼は、幼児の基本的習慣教養（教えそだてる）の時期の標準をわが国の生活実態に即して設定しようと試み、上記の調査を実施したのです。

調査結果から、基本的習慣の各項目について、わが国の児童の標準がまとめられました。この標準については、今日でもしばしば引用紹介されますし、山下の研究の集大成[3]も出版されていますので、詳しくはそちらをご覧ください。

四、第二部会における基本的習慣の研究

◇第二部会の活動

保育問題研究会には、次の七つの問題別研究部会が設置され、それぞれが、毎月一回程度の研究会を開催していました。

第一部会　保育の基礎的な問題
第二部会　幼児の保健衛生
第三部会　困った子供の問題
第四部会　自然と社会に関する観察
第五部会　言語
第六部会　遊戯と作業
第七部会　保育関係の政策的諸問題

第二部会は一九三七年五月にスタートし、おやつの問題、幼児の衛生習慣の問題など取り上げていました。十月の部会では、ゲストの山下が「幼児における基本的習慣の研究」について報告しました。

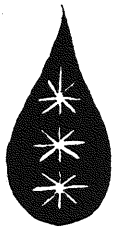
山下は、先に述べた調査を実施し、その結果の整理、検討をすすめつつある時でした。彼は、整理済みの食事、睡眠、排泄、清潔について各年齢においてついているべき習慣の標準を示し、保育が手技や遊戯を教えるのみであってはならず、幼児の全生活を指導することでなければならぬことを強調しました。

◇発達の〈標準〉の意義と問題

基本的習慣の自立時期の標準は、たとえば排泄について、一歳で排尿事後通告、排便事後通告、一歳六か月で排尿予告、排便予告、といったものでした。これは保育を進める上で有益でした。保育における全体の指導計画をたてるためにも、個々の子どもの指導の方針を考えるためにも、客観的規準が必要でした。経験のみに頼る手探りの保育に悩んでいた保育者たちは、発達の標準の提示を喜びました。

戦後の発達研究の進展により、今日では発達の各側面の標準はほぼ出揃っています。しかし、標準が、過度に強調されれば、個々の子どもの生活と成長が「標準」によって評価され、親や保育者の子どもを見る眼を歪ませます。今日ではそうした弊害がしばしばみられ、むしろ標準にしばられることの弊害が強調される傾向があります。

しかし、今日的感覚で発達の標準の意義を軽視し、あるいは否定することも誤りです。〈標準〉の意義と限界について、原点に立ち返って考えてみる必要があると思います。



◇基本的習慣の共同研究

さて、一九三八年より山下が第二部会のチューターとして参加することとなり、部会のテーマは幼児の基本的習慣の研究を取り上げ、生活訓練の問題を根底的に解明すること、とされました。

部会での研究の方法は、食事、睡眠、排泄、着衣、清潔の五つの習慣のそれぞれについて、二回か三回の研究会をあてました。最初にチューターの山下が問題の心理的解明、実例による方法的指示などを行い、次の回には、部会メンバーが幼稚園、保育所の集団的生活場面で視察した事項を持ち寄り、チューターとの共同研究により解決をはかる、という方針がたてられました。それにより、さらにこの問題についての標準を樹立してゆくことがめざされました。

研究はほぼ、当初の方針どおりにすすめられ、多くの記録が部会で発表されました。

例えば、秋田美子（当時、東京市向原方面館保姆）は、弁当箱からご飯をかきこむ六歳児が、箸の持ち方を指導することによって上手に食べられるようになった例を、庄司竹代（同、赤坂方面館）は、午睡のとき、いつまでも寝ようとしない幼児に、さまざまな働きかけを試みた例を報告しました。

第二部会の熱心なメンバーであり、当時明石町方面館に勤務していた阿部和子は、私に第二部会での経験をつぎのように語ってくれました。

今でも覚えているのはね、排泄の習慣ってことでね、なかなかトイレに行って排泄しない子どもがいたの。おむつ取るのがなかなか難し

かったんだけど、トイレで他の子どもたちがおしっこしたとき、なかなか習慣のつきにくい子どもが偶然ちょこちょこ走ってきたわけ。それで、他の子どもがおしっこしてるとこを、じっと見てたの。そしたらね、その後でその子どもにトイレさせたらいとも簡単にでてきたわけ。

あ、これだって思ってそういう記録を書いて発表したの。そしたら、山下先生にうんと讃められたのを覚えてるんですよ。そういうふうに、実際によって学んでいくというのが非常に新鮮で、私としては熱心にやりましたね。

（一九七七年八月二十六日、阿部和子談、聞き手・松本）[4]

＊

保育問題研究会は、保育のさまざまな分野について、日常保育の中でぶつかる問題を、取り上げ、共同で検討し、解決の方法について考え、それを実行し、その結果を持ち寄り検討する、という地道な共同研究をすすめました。基本的習慣に関する研究もそのひとつでした。今日の子どもの状況、保育の問題の方向を考えるうえで、やはりこのような地道な研究の積み重ねが必要であると考えます。

（淑徳短期大学）

引用文献

(1)松本園子『昭和戦中期の保育問題研究会――保育者と研究者の共同の軌跡／一九三六―一九四三』二〇〇三、新読書社　第二部　第一章　第一節「基本的習慣」

(2)山下俊郎「幼児に於ける基本的習慣の研究」『教育』一九三六・四、四巻四号

(3)山下俊郎『幼児の生活指導』一九七〇、フレーベル館

(4)前掲拙著、巻末資料「担い手たちの証言」6、阿倍和子証言

乳児クラスの保育より(2)

一歳の誕生日

田辺　敦子

「おはようございます」

その日の保育は、Jちゃんのお母さんのとびきり弾んだ挨拶から始まりました。いつもに増して張りのあるその声と嬉しそうな表情を見て、出迎えた私も嬉しくなり、自然に声のトーンが高くなりました。

「おめでとうございます」

そう、その日はJちゃんの誕生日だったのです。クラスで一番低月齢のJちゃんとあって、その一歳の誕生日は、クラスの子どもたちみんなが一歳になるという意味も含んだ記念すべき日でした。

「一歳になるなんて信じられないけれど、これでJもやっとみんなの仲間入りですね。明日のお休みは、お祖母ちゃんの家に行ってお祝いをしてきま

す。一升餅を用意してくれているらしいので、むりだとは思うけれど挑戦してきますね」

笑いながらそう言うお母さんの言葉からは、Jちゃんの誕生日を心から喜ぶ家族の様子がよく伝わってきました。誕生日は誰にとっても嬉しいものですが、とりわけ一歳の誕生日というのは、家族や周りにとっても大きな喜びとなる特別な日です。そして、その喜びを家族の方と共感することは、私たち保育者にとっても嬉しいことです。

さて、子どもが生まれてから最初の一年は、周りの大人が注意深くその子の健康と安定した育ちを守っていかなければなりません。例えば、赤ちゃんにとってとても重要な仕事である「泣く」という行為ひとつをみても、その都度その子が何を言わんとして泣いているのかしっかり受け止め、「ああか、こうか?」と受け返していく作業が日々くり返されます。勿論それらのやりとりの積み重ねが両者の絆を確かなものにしていくのだと思いますが、その子が真に家族の一員になっていくまでには、お母さんやお父さんにとっても修行の日々なのではないでしょうか。ですから一歳の誕生日のお祝いは、みんなが二人三脚で進んできた一年間へのご褒美という意味合いも持っているのでしょう。

更に、週明けのJちゃんの育児日誌（家庭と保育園とを結ぶ連絡ノート）に記された文章や送迎時の様子からは、お母さん自身の心の変化も感じ取ることができました。

『…週末は祖父母宅で楽しく過ごしてきました。一升のお餅は背負うことができませんでしたが、夢中で触って柔らかい感触を楽しんでいました』

これまでの一年間を必死にJちゃんと向き合ってきたお母さんでしたが、一歳の誕生日を無事に祝えたことが嬉しく、そのことが同時に安心感や精神的なゆとりにも繋がっていったのかもしれません。

『一歳の誕生日』には、きっと何か特別な魔法の力が働いているのでしょう。

ところで、成人式を迎えた二十歳の人へのインタビューで、よく耳にするセリフがあります。

「今日からは、社会人のひとりとして自分の行動に責任を持っていきたいです」

周りからの祝いの言葉や期待に応えようとする強い意志のあらわれなのでしょう。私も自らの成人式を振り返ると、やはり彼らと同じように新鮮な気持ちで未来への大きな希望を抱いていたように思います。

『昨日までの自分とどこが違うのか、それを言い当てることは難しいけれど、何もかもが新鮮で、今の自分なら何でもできそうな気がする』という心境でした。

一歳の誕生日を迎えた子どもたちと接していると、何かがはじけたような表情の明るさを感じることがあります。その様子は、成人式を迎えたばかりの若者のように力強く、輝いています。きっと子ども自身も、大人からの褒め言葉や励ましが、自分に向けられた愛によるものだということを肌で感じ取っているのでしょう。この時期は、大人のねがいと子ども自身の『大きくなりたい』『あれがしたい、これがしたい』という意欲とがバランスよく響きあう瞬間なのかもしれません。

私的なことになりますが、実は先日ちょっとした

腰痛になり、動きに気を配らなければならないことがありました。慢性の腰痛になっては困るので、普段ならたやすいことも、その時ばかりは少し慎重に行うことにしました。勿論そのことは胸のうちにあっただけなので、実際の動きを制限したわけではありません。ところが驚いたことに、一呼吸おいてから動作に移ろうとする私を前にして、子どもたちは実に能動的な姿を見せてくれました。中でも担当児のYちゃんにはびっくりしました。Yちゃんはまだまだ歩行が不安定な為、長さのある移動の際にはよく抱っこをしていたのですが、このときは私が抱き上げることを待たずにゆっくり歩き始めました。せっかくなので、私もYちゃんが歩く様子をそのまましばらく見守ることにしたのですが、真剣な中に見られる意欲的なその表情は、自分の力を信じて進もうとする頼もしさに満ちていました。そして、目的の達成を私が褒めると、嬉しそうに笑っていました。日頃から子ども一人ひとりの成長をしっかり捉え、見通しを持った関わりになるよう心掛けていますが、それでも子どもの成長の方が上手だったことに改めて気づかされ、貴重な経験をすることができました。

今私たちのクラスは、Jちゃんの一歳の誕生日を境に、一歳児集団へとステップアップしました。その成長を喜び合いながら、これからやってくる自我の芽生えの時期を安心して迎えられるよう、今この時期の保育を丁寧に行っていきたいです。そして、大きく伸びていこうとする子どもの意欲をしっかり受け止め、好奇心もまた引き出していきたいです。

（かしのき保育園）

障碍をもつ幼児の保育(22)

―この子と出会ったとき―

津守　真(M)
津守　房江(F)

言葉がなくても思いは通じる

コミュニケーションという言葉はもう日本語になっていて、国語辞典によればコミュニケーションというのは「言葉や文字や体の動きによって、他の人に『伝達する』ことを言う」とあります。現実には言葉を話さない人とどうやってこちらの思いを伝えたらいいのでしょうか。

子どもの感じている世界を受け取る

F　あなたはいつも「言葉がなくても子どもたちは何でも分かっている」と自信を持って言われますが、その根拠というかコツは何ですか。

M　子どものそばにいれば、その子の感じていることは

大抵分ります。分からないときは子どもと同じように子どもの速さで歩いてみたり、子どもが手を挙げたらこちらも手を挙げたり、同じように動いてみるともっとよく分かります。

F　赤ちゃんが幼いころは、笑っていると嬉しいのだろうと思って私も嬉しくなるし、不快な表情をすると、どうしたのだろうと考えて心配しました。『子どもの心を受け取る』ことの始まりがこんな素朴なところから出てくるのですね。

M　どんな人でも心に感じたことを何かで表現します。以前私が「子どもの行動は心の表現だ」ということを発見したとき、行動の見方が変わりました。なんだか理解できなかった子どもの行動の内側には心の感動や、喜びや悲しみや悩みなどが詰まっている。言葉や文字であらわれない子でも心に感じることは私と共通なことが多いのです。

F　だから「子どもたちは何でも分かっている」と自信を持って言えるようになって来たのですね。

人間が生きているということは、子どもも大人も強いものも弱いものも感じる内側があり、それを表現することだとも言えますね。それを受け取ってくれる人がいるときその人にとって意味が出てくるのでしょう。

遊びの中で子どもが感じること

電車が繋がらないとき

F　ある育児相談で二歳一カ月の子がプラレールを繋げようとして、ちょっとでもはずれると怒ってレールを投げて大変だというのです。プラスチックのおもちゃは古くなると割れやすく、繋がらなかったり、具合が悪くなることが多いのです。その子の普段の様子を尋ねると、お母さんから見て困ったことや止めなければならないことがたくさんあるようです。お母さんは子どものことを心配してみている。レールが繋がらないで苛立つ子どもには、お母さんとの間で心が繋がらないことが多いので

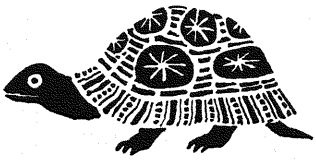
はないかと私は思いました。レールが繋がらないということが、この子にとって特別に我慢がならない重要なことなのでしょう。

M　愛育学園の小さい子のクラスで保育していたとき、離れてしまう電車やレールをセロテープで何回も繋いだことを思い出します。それくらい子どもにとっては繋がるかどうかは真剣なのですね。電車という「物」がつながるだけでなく、人との繋がりと重ねてイメージしている。離乳のときや、自分でやりたい気持ちが出て来たときは、お母さんとの繋がりが変化している時期と言えるでしょう。物質のイメージが子どもの日常の大切な問題と重なって心に蓄えられる。

この子も、何でもお母さんに依存するのではなく、繋がらない時があることをプラレールで練習しているとも考えられる。

F　そう考えるとプラレールが繋がらないということも、子どもの成長にとっては意味のあることかもしれませんね。

でも、育児の実際家の私から見ると（笑い）、この子の生活の中では苛立つことがとても多くて、落ち着いた穏やかさを育てるという点では、複雑なレールのおもちゃはもう少し時間がたってから与えた方がいいと思うのです。



電車が繋がる

M　うちによく来る二歳過ぎの孫は、お休みの日に父親と電車を見に行くのを楽しんでいます。東京駅のホームで東北新幹線の『はやて号』と山形新幹線の『こまち号』の切り離しのところが繋がっているのを見た。ちょっと見ると二つの新幹線がキスしているみたいで「お鼻とお鼻をくっつけているねえ」と言う言葉が心に残ったようです。それまでほっぺたにチュッとされるの

が嫌いだったのに、それを見て以来、おとなしく肌を触れ合うようになったということです。

F　自分が電車になったような気分で嫌なことが乗り越えられたのでしょう。

すれ違い

F　その子はこのような経験の中で大人がはっとするような言葉を言うことがありました。「すれ違い」です。

M　東京駅の新幹線のホームで二台の列車がすれ違うのを見てとても心に残ったのでしょうね。その子が、空に白い雲と黒い雲がゆっくりと動いているのを見て「すれ違い！」と言いました。イメージとして心に残っていたものを、言葉として言ってみることで、自分でもはっきり分かり、言葉として定着することになったのかと思います。

「すれ違い」ということも電車や空に浮かぶ雲について言うときは、大人はすんなりと受け取れるけれど、心の問題となると子どもの置かれている状況をよく考えなければならないですね。例えば、年下のきょうだいが成長して来て障碍を持つ上の子を追い抜いてしまうことはよくあることです。そんなときは上の子の不安な気持ちをしっかり受け止めなければならないでしょうね。

F　自分の後から繋がってくると思っていた弟や妹が、自分とは違う学校に行くようになって、追い越されすれ違うときの上の子の気持ちはどんなでしょう。言葉で表せない子でも原風景として心に残るでしょう。このような悩みや喜びを子どもたちが遊びの中で表現している。それを注意深く見るとき、あなたがいつも言われる「子どもは言葉が分からなくても事柄は何でも理解している」ということに共感出来ますね。

行き止まり

M　私が忘れられないのは一人の男の子が幼稚園から紹介されて、週一日だけ愛育学園の幼児のクラスに参加し

たときのことです。この子は水の流れに興味を持って、水が何処から来て何処へ流れて行くのかに興味を持ちました。そのうち小学校に進学するころになりました。家族もとても心配して、スタッフの誰彼をつかまえては普通の小学校に進めるかどうかを相談しました。その言葉は本人の耳にも入っていたのでしょう。そのころ、この男の子がプラレールを使ってやった電車の遊びは印象深いものでした

F　ああ、片方のレールが繋がっていないで、壁に向かっているのでしょう。電車が走ってくるとレールを突き抜けて壁にぶつかってしまう。はじめは気が付かなかったけれど、この子が小さい声で「行き止まり」と言っているのを聞いて、この子が行く先に希望を感じていない、むしろ不安を感じていることに気が付いたのです。

M　このほかにも『別れ道』とか『危険』『止まれ』など電車遊びには危険や不安を表しているものが多いですね。

人生の道と重ねて

F　今回は電車遊びに出て来る言葉を取り上げてみました。子どもが電車遊びが好きなのは、自分の思いと重ねるからでしょう。あの力動的な姿に憧れ、車が繋がることに心を引かれる子、行き止まりに不安を感じる子、すれ違いに自分と他の人との関係の不安を感じる子、など大好きな遊びの中に人生の大切な出来事を隠喩として感じ取る。言葉がないとコミュニケーションが出来ないと考える事は間違いだと思うのです。

始めに話した「言葉がなくても互いの思いは通じる」ということを再確認しましたね。

はれ！ときどき

その③　＊さとうひろこ＊

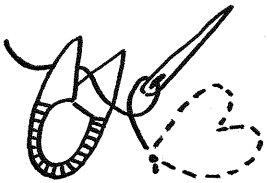
つくることの楽しさ・豊かさ

卒業の記念にと、あるお母さんから素敵な箱をいただいたことがある。品の良い綺麗な布で包まれたその箱は、開けると中に、子どもたちと私の懐かしい写真がプリントされていた。世界に二つとないその箱は、私の宝物になり、さらにその箱が縁でお知り合いになった、ものづくりの教室のA先生は、今では私の大切な師匠である。ものづくりの好きな子どもから大人まで大勢の人が集まるA先生の家は、まさにアイディアの宝庫。先生いわく、「私たちの身の回りにあるものはみ～んなつくってみようという気になりさえすればつくり出せるのよ」

大事にしていた腕時計のベルトが切れ、気に入ったものがなかなか見つからないでいたことを思い出し、好きな布で時計ベルトを作ることにした。私のイメージを形にしていくために、A先生は、その経験と技術を惜しみなくつぎ込んでくださった。時計とおそろいのバッグまで出来上がった時には、私はすっかり先生の魅力と、ものづくりの世界に引き込まれていた。つくることを通して、人との関わりが豊かに拡がっていくこと、つくりだす楽しさを人に伝える伝え方。保育につながる大事な要素がいっぱいだ。思えば、子どもたちとの暮らしを、心から楽しんでいる人たちは、ものづくりに関心が高い人が多いようだ。

梅雨空の週末、洗濯ものの山のことは、少し忘れてものづくりの旅に出るのも良いのでは……。

（幼稚園勤務）



ある日

撮影・平野　清

葉っぱの力(1)

群馬　直美

葉っぱをテーマに絵を描き始めて、二十三年になります。

絵を描くことは、もの言わぬモノたちとの対話です。自分自身との対話でもあります。描きながらさまざまなことを考え、教わり学び、その結果つかみとったものが、一枚の絵となります。

絵は、言葉を介さない世界です。ですが、言葉のたくさん詰まった世界でもあるのです。

ひとつの画面に一枚の葉っぱを、原寸大でありのまま丹念に描いています。珍しい葉っぱではなくて、日常生活の中で、極々自然に出会った葉っぱです。そんな葉っぱをかたわらに、最低十八時間の〝葉っぱの宇宙旅行〟が始まります。

葉っぱの宇宙旅行・ルート案内

〝細かな葉脈〟の散策のひととき

〝虫食い穴の冒険〟に絶叫

神さま工場特製〝色の妙技〟を堪能

命の勲章〝傷跡の遺跡〟訪問

〝輪郭のギザギザ山〟登山

〝産毛の海〟を遠泳（オプション・コース）

だいたいこんな感じです。

葉っぱの旅の八年間が、一冊の本となりました。『木の葉の美術館』（世界文化社刊）です。出版に先立ち、これまで描いた木の葉の絵一枚一枚に、文章を書くことになりました。わたしは絵を描く人間だから、言葉の世界はなあ……恐る恐るペンを執ってみれば、なんと果てしない言葉の宇宙が、自分の中にとぐろを巻いていたことか！　描き上げた一枚一枚の葉っぱの絵に、凝縮された言葉がつまっていました。

「ひとつのモノをよーく、見る。徹底的に見る。見たものを手に伝えて、描く」

こんな単純作業の繰り返しですが、はかりしれない洞察力や観察眼が、自ずと養われていたことに気づかされました。

これぞ、〝葉っぱの力〟。ということで、いろいろな対話、コミュニケーションについて見ていきたいと思います。

木と踊る

さて、わたしは絵を描くだけでなく、踊りも踊っています。

植物公園や人里離れた山奥などで展覧会をするとき、決まってやるのが「木と踊る」パフォーマンス

です。

「我ら宇宙船地球号の乗組員」ということで始めました。人も動物も植物も、みんな等しく同等の立場としての〝我ら〟です。

わたしが木と踊ることで、動かないはずの木が、踊っているように見えたり、何か意思を持った存在として、感じて頂けたら大成功なのです。

アトリエの近くに、国営の大きな植物公園があります。そこでもやってみました。

園内放送で集まった人たち二十人くらい。みんな興味津々。わたしはドキドキ。なにしろ即興で踊るのですから、これから先どんなことになるのか、誰も知らないのです。張本人のわたしでさえも……

「みなさーん、これから木と踊るパフォーマンスを始めます。最初はみんなで一緒に、ぶらぶら歩きます。踊りたいと思った木と出会ったら、踊り始めますので、どうぞ、わたしの後をついてきてくださーい」

と言って歩き始めると、みんなぞろぞろついてきてくれるのでした。

園内のきれいに整備された道ではなく、徐々に、道なき道に分け入ります。みんなも釣られて道なき道に。柔らかな土の感触が、靴底から伝わってきます。生茂った木の下枝を、身をかがめてくぐりぬけると、みんなも身をかがめてくぐりぬけます。くぐりぬけながら、ある人が言います。

「おっ！　こんなところにドングリが！」

それを受けて別の人が、

「あら、こっちにもあるわよぉ」

そしてまた別の誰かが、

「おっ、しまった！踏んでしまったよぉ」

知らない人たちのコミュニケーションの輪が、少しずつ出来上がっていきます。ちょっとした冒険旅

行です。わたしはそのナビゲーター。みんなの心とからだが踊り始めたぞ！と嬉しくなるわたし。

突然、ピタッと立ち止まります。踊りたい木と出会ったのです。まるで打ち合わせしたかのように、みんなもピタッと止まります。一本の木を前にして、完璧に出来上がったコミュニケーションの輪。

さあ、ここからは、わたしと木との対話の時間です。みんなに見られているという緊張感で、普段、味わうことのできない木の側面が見えてくるのです。

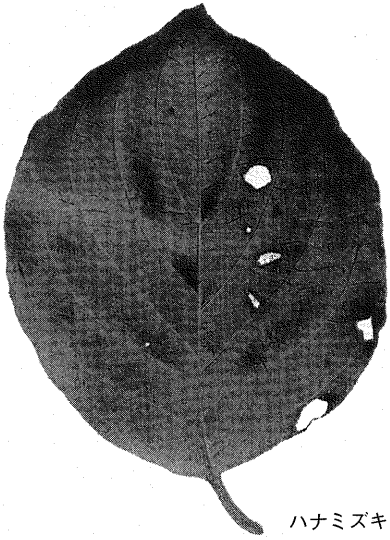
これまで踊った木の中で一番印象深かったのは、ハナミズキ。優しいと感じたのは、ハクモクレン。泣かされたのは、アカマツ林。

ハナミズキ

ハナミズキは、北アメリカ出身の木です。その木が、なぜ日本にいるのか？

一九一二年、東京市長だった尾崎行雄氏が、サクラの苗木をワシントンに贈りました。お返しとしてやって来たのが、ハナミズキ。植物親善大使ですね。

わたしの町のいつも通る道沿いの街路樹も、この木。葉っぱの色づき加減が独特で面白く、何枚も描いていました。だから、とても馴染み深い木だった



ハナミズキ

のです。いざ踊ってみてビックリ！　樹肌はゴツゴツ、画びょうをまとっているんじゃないかと思うくらい痛いくせに、小枝にちょっと触れただけで、悲しいくらいポキポキと折れてしまうのです。

陽炎の儚さと棘の鋭さをあわせ持った、切ない木でした。

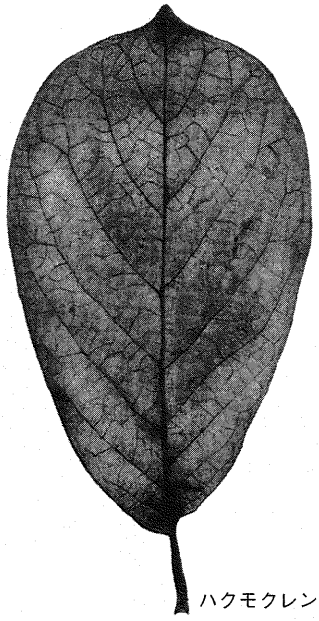
ハクモクレン

「木と踊る」パフォーマンスを始めて、一番最初に踊ったのが、この木。

生長すれば高さ二十メートルにもなる高木ですが、わたしが踊ったのは、三メートル足らずの可愛らしい木。西日を浴びて、まだ落ちきらない葉が、大判小判のように黄金色に輝いています。最初は遠巻きに……どうも馴染めません。思いきって小走りに根元まで一気に詰め寄ると、やっと、たおやかなダンスの時が流れ出しました。遠くで遊ぶ子どもたちの声が、幸せな音楽のように聞こえてきます。しなやかな枝。なんだか高貴な生まれの方と踊っている気分。

それもそのはず。中国出身のハクモクレンは、故郷中国で、高貴な花木として古くから愛でられ、寺院や宮城に多く植えられていたのです。

じつにしなやかな優美さを持った、優しい木でした。

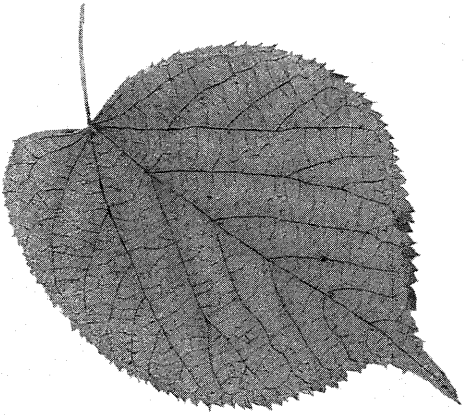


ハクモクレン

アカマツ林

小淵沢在住の画家さん、Mご夫妻の展示スペースで、展覧会をしたときのこと。

踊りの格好に着替えて出てくると、遙々駆けつけてくださった友人知人たちで、会場内はごった返していました。みんなハーブティーを飲んだり、手作りケーキを食べたり、非常に和やかなムードです。



セイヨウシナノキ

あまりの和やかさに、止せばいいのに、ひとりひとりに自己紹介なんかさせちゃったりして……空気はますます和やかに。もはやこれから踊りを見る場の雰囲気ではなくなってしまいました。このままここで、お茶してたい感じ……それでも無理してみんなを、アカマツ林に連れ出しました。

スラーっと天高く伸びたアカマツの幹、幹、幹。仰げば、林立するアカマツの枝が、入り組んだ鉄格子のように空をふさいでいます。アカマツ牢に幽閉された、蟻の心地です。

悪戦苦闘の三十分の末、踊りの最後を決めようとしたとき、脇道をパカッパカッと馬が駆け抜けて、事も有ろうにわたしが踊っているすぐ横で、乗っていた子どもが落馬。見ていた人たちの意識を全て持っていかれて終わりでした。その後、会場に戻り、さらに和やかな雰囲気で、何事もなかったかのように、人と人との暖かなコミュニケーションの輪

が広がりました。

アカマツ林には本当に泣かされたけれど、極彩色の映画の一齣のように心に残っています。失敗してもやらないより、やったほうがいい。（涙の教訓1）

さて、「木と踊る」パフォーマンスを見た人たちの反応は？といえば、みんな口をそろえて

「こういうことは、どんどんやったほうがいいですよ」

と言うのには驚かされました。ある年配の男性は、眼鏡の奥の目を潤ませながら、にこやかにそう言ってくださいました。お顔を見るとその方も、ひと踊りされたような清々しさ。

木に登ったり、体当たりしたり、逆さになったり、転げたり、駆けずり回ったりと、常軌を逸したわたしの踊りに、です。こんなことしたら、みんなに石でも投げつけられるんじゃないかと思っていたので、その反応にかなり面食らいました。

コミュニケーションとは、自分自身を深く掘り下げる作業と同時に、外に外に、発信し続ける作業の循環で出来ているのだな、とこのとき実感しました。

出来うる限り常識に囚われることなく、〝葉っぱの力〟のコミュニケーションを、この誌面で探究していきたいと考えています。

第一回目の〝葉っぱの力〟は、あなたとうまくコミュニケート出来たでしょうか？

（葉画家）

☆イラストは三点とも筆者による。紙／テンペラ。

群馬直美『木の葉の美術館』世界文化社、一九九八より転載。

ポジティブサポートの世界(7)

変化が起こす変化(1)

村田　愛

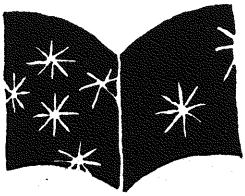
ポジティブサポートは、「変化」を生みます。その変化は、時には目の輝きを増すことであったり、生きる意欲をもつことであったりします。この連載の二回に分けて、ポジティブサポートを取り入れ、継続することで「変化」が生れたアダムの場合を紹介します。その変化はどのように生れたのでしょうか。そして、どのようにその変化が生かされたのでしょうか。変化が生かされることでどのような力が生まれたのでしょうか。

＊

最近私は過去にさかのぼり、私が（アメリカで）大学時代通った公立の養護学校小学部の実習先でのビデオを見てみました。その頃に私はポジティブサポートに出会い、どのようなことに心を砕いていたのか、初心を思い出すためにも見てみたいと思ったのでした。大学でいくつかの授業をとりながら週二十時間の実習をうまく時間的に割り振り組み立てられている毎日。その頃の生活は、毎日をこなすことに精一杯で、時間に追われ焦りと不完全燃焼的な感覚で一杯だったように記憶していました。けれど、日々実習先で生徒たちと関わり新たな発見をし、みんなで笑いあった光景がビデオには映っていました。任せられたレッスンプランについて目標以上に達成感を感じられた時のことや、生徒達との楽しいやりとり、それぞれと関係が深まっていく手ごたえのある充実感を覚え何度となく救われたように感じたことなど、忘れかけていた貴重な経験がよみがえってきました。現実の変化と自分の中での葛藤のくり返しとも言える、向上心と活気の溢れた生活を思い出しました。

ベスのクラス

私が一学期間（週二十時間）実習した高学年（五、六年生）のクラスは、知的障碍、主に自閉症と診断された六人の生徒と、担任の先生ベスとアシスタントのグロリアという構成でした。ベスのクラスは比較的カラフルで、視覚的にもわかりやすいように工夫されていました。クラス内の掲示物には、ラミネートとマジックテープを使用し生徒達が自ら触れられるようになっていました。手作りの時間割りはクラスにある時計の絵で時間が表示されていて、隣には授業科目が絵と文字で示されラミネートされているものを貼って組み合わせるようになっています。授業が終わる度に誰かが剥がせるようにそれもマジックテープ使用になっていました。ベスは、クラスのすべてを教材と考え、視覚的にも物と名前



の繋がりを示すことと、その空間をみんなで作り共有している感覚を大切にしたいと言っていました。

まだ二十代で小柄なベスは、それぞれの生徒達にとても一生懸命で、常に新しい情報を取り入れ積極的に活用していく姿勢を持っている活発な先生でした。アシスタントのグロリアは、自分の子どもが大学生ということもあり、そのクラスの生徒には孫のように接し、親身になって厳しくするけれど、そこには愛情が感じられました。とても相性のいい異なるタイプのベスとグロリアの二人がクラスの和やかな雰囲気とあったかなクラスの空間を作り出していました。

実習中にぶつかった最初の壁

アメリカでは、実習生はクラスの担任の先生とほぼ同等に扱われます。ベスの場合は特にフレンドリーで協力的だったので、いつもお互いに相談し計画を立てていきました。その時の相談内容は主に生徒それぞれが参加できる教育的配慮のあるクラス全体のレッスンプランの組み立て方や、個別の科目別レッスンプランなどです。

アメリカでは、個人に合わせて三ヶ月後、六ヶ月後、一年後の個別の科目別の目標と計画を立て、それを書き出して提出しなければならない個別教育計画書のようなものがあります。それは、学期ごとに教師と生徒と生徒の父兄で見直され、必要な場合訂正していきます。その計画を実際に、個別でありかつその生徒の生活および人生の中で優先順位の高い内容のものにするには、その個人をどれだけ知っているかが必要不可欠になります。

私がその計画を書き実行するにあたって頭を抱えたのはアダムの場合でした。アダムはいつもニコニコしていて、立ち上がりグルグル回りながら優しく自分の頬をたたくのが印象的なハンサムな男の子でした。まわりが話しかけはたらきかける時アダムはニコニコしながら頷くか、言葉が素通りしたかのように感じる程クルクル回り続けるかといった感じでした。

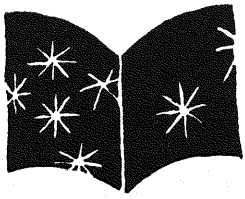
問題だったのは、それ以外わからないことばかりだと

いうことです。その時は「今更ながら」なのですが、「それがアダム」といった感じの感覚で日常が流れていたのかと思うとショックでした。いろいろなものを辿ってみるかのように、彼の過去の個別教育計画を見直してみても月並みなものが羅列されているだけのような気がしました。

そこで、私が提案したのがポジティブサポートでした。

アダムのポジティブサポートを行うにあたって

ポジティブサポートは、ある人をよりよく知り、それを基盤にして、その人の将来を考え協力的に築き上げていく為に行います。つまり、その人をより理解することで現実を見つめ直し、これから自分達は何が出来るか、どうしていくことがその人にとって望ましいか、を考えていく作業をしていきます。ポジティブサポートのセッションには、ファシリテーターと本人（仮にAさんとします）に関わる人達が、Aさんと共に参加し、ファシリテーターが掲げる課題に基づいて順番に発言していきます。その課題は、「Aさんの好きなこと」や「Aさんの得意なこと」などです。その課題に基づいて、参加者はそれぞれから見ているAさんについて、できるだけAさんの立場に立ち、思いつくことを発言していきます。そうして、順番に発言することで、参加者同士が対等感をもち安心して発言できる場がポジティブサポートのセッションです。



ポジティブサポートを取り入れることで、アダムをよりよく知ることと、家族や他のアダムが関わる教育関係者から協力を得られることを私は期待しました。学校で見せる姿、行動はほんの一面で、学校以外でもっと多くの時間を過ごす家庭や生活空間の人間関係を知ることが、アダムを知る大きな手がかりになると、私は特に家

族の参加／協力を期待していました。ところが、アダムの御両親は、仕事と家庭の都合で参加できないと言われました。御両親はそれぞれ二つの仕事を掛け持ちで持っていて、その上アダムにはきょうだいが上にも下にも合わせて三人いるということで、アダムのことを考える為とはいえとにかく時間を作ることができないということでした。もともと公立の養護学校の場合、生徒達はスクールバスで登下校するので、御家族との接触はほとんどありませんでした。家庭内で問題があった時にアダムの鞄に入っている連絡帳に簡単に書いてあるという程度の接触しかありませんでした。極端に言うと学校と家庭の連携を促す協力体制を築く必要性を感じているのは私たちだけなのかもしれないと無力感と歯がゆい感覚を感じることも多々ありました。

しかし、私が直面している問題は、アダムという生徒のことが驚く程にわからないということでした。どんなことをすると一緒に楽しめるか、また喜ぶか位しかわからず、食べること以外に何に心動かされるのか、どんな風に生きていきたいのか、どんな目標を持っているのかなどわからないことばかりだったのです。きっかけは、「個別教育計画書」でしたが、それらを知ることは私とって重要なことであり、それらを踏まえなければ個別教育計画書など書けないと思っていました。

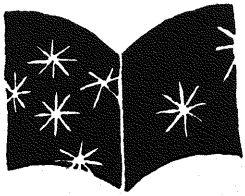
参加者が少ないからといって、ポジティブサポートを行わないという判断はできません。「アダムを知りたい」ここでまた何もしないで日常が流れること程、空しいものはないだろうと思いました。結局、まずはアダムとベスとグロリアそして、アダムのスピーチの先生と私の五人でセッションを行うことにしました。

アダムのポジティブサポート

学校の帰り際の時間を使って、ポジティブサポートのセッションを手短に行いました。その時に行った課題は、「アダムの好きなこと」でした。そこでは、アダムが学校で好んで食べているものが複数出てきました。そ

して、ジャンプしながらクルクル回ること、自分の頬を触れたり、彼に話しかける人や彼の前に座っている人の頬に優しく触れること、トイレにいく時嬉しそうなどの発言がありました。アダムは言葉として発音はしないにしても、彼なりにポジティブサポートのセッションに参加し、他の参加者の発言の番の時には、じーっと発言者の目を見て理解しようとしていました。時にはある発言を聞いて「当たり！」とでも言うように、ニコニコしながら嬉しそうにクルクル回りはじめることもありました。

そして、そのセッションが終わり、アダムがスクールバスにニコニコ乗って帰った後、残った参加者達は、なんだかそのセッションや課題の余韻が脳裏から離れないかのようにアダムについて話し続けました。スピーチの先生は、アダムがどんな時に集中するのかが実はわからずスピーチのレッスンの時間が過ぎてきた気がすること、つまりスピーチのレッスンが終わった時、そのレッスンの手ごたえが感じられないけれど、アダムは喜んで楽しそうに過ごしている。しかし、いつもそのスピーチのレッスンは振り出しから始めなければならないと言いました。ベスも似たような感覚で、レッスンをしても手ごたえが持ちにくいということを言っていました。何が問題なのか、どうすればいいのか、私たちは話し合いました。スピーチの時間に関しては、もしかしたら、教室から連れ出されるからスピーチの時間が好きなのかもしれない。もしくは、スピーチの時の御褒美が嬉しいのかもしれない。「とにかくいろいろと模索しながら試してみよう」と私たちは話し、その日は終わりました。



気づいたこと、実行に移したこと

ポジティブサポートを行った次の日から、私たちはアダムのスピーチのレッスンをアダムを連れ出し別の教室

で行うのではなく、教室内で行ってもらうことにしました。スピーチのレッスンの内容を私たちも知ることで、レッスン以外の時間にそこでアダムが学ぶコミュニケーションのとり方を継続することができ、私たちもお互いに学ぶことができると考えたからです。最初は、アダムのスピーチの時間になるとクラス全体がざわざわして、「御褒美の先生が来た」なんて騒ぐ生徒もいました。ほとんどの生徒がスピーチのレッスンを受けており、その先生は数種のちょっとしたお菓子とシールを御褒美として用意していることを知っていました。

アダムのスピーチのレッスンが教室内で行われるようになるということは、みんなにとっても環境の変化です。環境を変えるということは、協調性とクラスのみんなの協力が必要になります。初回には手短にアダムのスピーチのレッスンは教室内で行うようになることをそれぞれに説明しました。アダムのスピーチのレッスンの間、他の生徒達が自分達の教材やその時の個別授業に集中できるよう必死の努力が必要でした。

アダムにとっての意味

何度かスピーチのレッスンを見ていて、気づいたことがありました。赤、青、黄色の識別をすることや数を一から十までスピーチの先生が数え、アダムが数字のパネルを指差していくことで「御褒美」を貰えなかったり、貰えたりしているアダムを見ていて私は首をかしげてしまいました。

スピーチの先生は積極的にアダムにアピールしてがんばっているのは手にとるようにわかるのですが、アダムは特に集中しそのレッスンに取り組んでる様子でもなく、「アダム！　ポイントレッド」（赤を指差して）と言われてもニコニコ頭を揺すり、先生に笑いかけたりしており、立ち上がってクルクル回ろうとしていました。時々うまくいって御褒美を貰えると、その御褒美を純粋に喜び、食べながらクルクル回るといった感じでした。

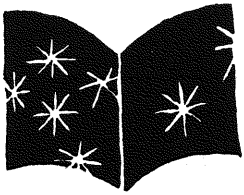
私が首をかしげてしまったのは、今アダムにとって何より優先されるべき大切なことが、色や数字の認識であるように思えなかったからです。

アダムのmotivation

私たちが書かなければならない個別教育計画は、科目別で専門分野別に欄がもうけてあります。もちろんスピーチの先生も、その専門分野としてアダムの個別計画を書かなければなりません。マニュアルのようなものもあり、必要であれば過去の個別教育計画を継続する形で書き出すこともできます。しかし、ベスも私もその様な手順には不満を感じていました。

私たちは短いポジティブサポートのセッションを積み重ね、「アダムが興味のあること」や、「嬉しくなること」／「悲しくなること」、などという課題を行いました。そして共通理解を持つことと、次に繋げていく為に話し合いました。私たちが大事にしたいと思ったことは、彼は人に認められることで心動かされる、人のリアクションがかなり影響力を持っているということでした。

そこで、「御褒美」は、食べるものではなく、別に「アダムが楽しめるもの」に変えることを提案しました。スキンシップやクルクル回ることや何か人と関わり楽しめるものをアダムの御褒美の「選択肢」とする。そうして、常にアダムがコミュニケーションをとり、アダムが選べることを増やすことが大切なのではないかと考えました。



では、どう選択肢を提示し、アダムが選び表現できるように考えていくか。

アダムのコミュニケーション

アダムにとって意味のある、彼から発し直接誰かに表現できる具体的なコミュニケーションの取り方が見つかっていないという決定的な問題がありました。

アダムがわかりやすく、選び／表現しやすい方法とし

てベスが用意したのがＰＥＣＳ（註）でした。ＰＥＣＳは、単語が絵と文字でわかりやすく正方形の枠に表示してあります。アダムにとって必要な意味のある単語を私たちが一つ一つ切り落とし、ラミネートしてマジックテープでボードに貼り出します。そして、アダムがそのボードから表現したい単語を自分で取り出し、相手に示すことができるようになっていきます。アダムにとって必要なボキャブラリーから始めるという発想なので、そのアダム用ボードは「アダムのボキャブラリー」が羅列され増えていく形になります。彼の好きなもの（数種の食べ物、飲み物など）、彼が必要としている日常的な言葉（トイレ、休憩）から始め、徐々に数を増やしていき、最終的には複数のボキャブラリーを組み合わせセンテンスをつくり表現／やりとりできるようになることを目指すものです。

アダムが生活の中で必要としている言葉はさすがに吸収が早く、ＰＥＣＳを指差すことから、それを取り出し相手に見せるようになるまで予想よりはるかに時間がかかりませんでした。スピーチの時間にアダムは集中力が途切れると、自分からニコニコと「トイレ」を取り出しスピーチの先生の顔を覗き込みながら手渡します。その度にスピーチの先生は苦笑いしながら承諾していました。私たちは、それを微笑ましく見ていました。

生活の中で、自分が表現することが相手に伝わることの満足感と充実感／達成感を感じるようになったアダムは、いろいろなものが変化し、開けていく感覚を覚えていったのだと思います。その変化が生れると同時に、新たな問題が立ち上がってきました。次回は、アダムの「変化」と「問題」について書きます。

（ポジティブサポート研究室主宰）

註　PECS：Picture Exchange Communication Symbols（Mayer-Johnson, Co. 1994）

ブレントでの障碍児へのサポート(2)

―ある障碍児のための学校と そのアフタースクールクラブのこと―

清原　規子

私は、昨年の秋から障碍児のための小学校（マナースクール）内で活動しているアフタースクールクラブ（一般的には日本でいう学童）のプレイワーカーとして働き始めた。それぞれの場所によってやり方などが違っていると思うが、私が働いている所の話が出来れば、と思う。

ブレント区の学校事情

現在ブレント区内には、約五十校の小学校と七校の中学校があり、公立の他、イギリス国教会、カトリック、ユダヤ人のための学校、イスラム教によるものなど多様で、ジプシーのように移動しながら生活している子どもたちのための特別な学校もある。

多国籍の子どもたちが通う学校での、もっとも大きな課題の一つは言語ではあるが、実際には子どもたちは吸収するのも早いので、英語に慣れ親しみ、逆に親のために通訳をする場面などが見られたりするようである。学校の先生を選ぶのに、それぞれの国籍を持っている人を採用しているのも、子どもにとっては安心できる環境であるのかもしれない。

スペシャルニーズの子どもに関しては、基本的には、他の子どもたちと同じ学校に通学するが、各学校にはＳＥＮＣＯ（Special Education Needs Co-ordinator）という責任者がいて、その子どもたちへのサポートが適当か、自分の学校で彼らのニーズをどこまでサポートできるかなどを、担任らと共に考えている。さらに特別な助けが必要な子どもたちに対しては、担任、ＳＥＮＣＯ、親などが福祉の専門家とも話し合いをしながら、障碍児のための学校に通学させることによって彼らのサポートをたしかなものにし、子どもの発達・変化によっては、他の子どもたちが通っている学校に再び転校することもあるようである。

マナースクールのこと

私が現在通勤している学校の建物は、百年前にやはり小学校として建てられたものを使用していて、かなり大きく、外観はどっしりとして歴史を感じさせる。各クラスの教室の他、他の小学校と同じように講堂、音楽室、図書館、美術室、保健室、コンピューター室等がある。スピーチセラピー室や作業療法室では、フルタイムで働いている専門家によって、子どもへのセラピーが行なわれている。室内プールもあって、どんな形でかはわからないが、放課後は毎日、子どもたちのために開放されているようで、親子で来ている姿を多く見る。

子どもたちは四歳から十一歳、学習をする上にお

いて困難をきたす子どもたち―学習障害のある・あるいは複雑なニーズのある・特別に言葉に関する問題のある・自閉症児等―が通ってきている。イギリスでの通学は、親による送迎が普通だが、この学校はブレント区によって運営されている送迎バスを利用している。

一クラス五人から十人（年齢混合）、それぞれのクラスには、担任とアシスタント（子どものニーズによっては、一対一のアシスタントも配置されている）がいて、授業の科目自体は他の学校と同じだが、一人一人のプランをそれぞれのニーズに合わせて作っている。そして、各学期ごとに先生たちがそれを確認、再考している。ユニークで、かつ、職員同士のコミュニケーションあるいはサポートにも役立っていると思われるのは、十四ほどあるクラスを三つのチーム―四歳から七歳のチーム、七歳から十・十一歳のチーム、自閉症児（自閉的傾向も含む）のチーム―に分け、チームごとに定期的に話し合いを行っていることである。

セラピーは、スピーチ（あるいはラングエージ）セラピーや作業療法の他、専門家によるアートセラピー、ミュージックセラピー等も取り入れ、特にコミュニケーションの発達に重きを置いている。

子どもたちにいい教育を行なうためには、親と学校との関係がとても大切だということで、一年に一回の親と学校の全体での話し合いと一年に二回の担任との話し合いの他、担任とのコミュニケーションの手段である週に一度のリンクブック、誰でも参加できる定期的な「コーヒーモーニング」―日本でいう井戸端会議的なもの―も行なっている。

マナーアフタースクールクラブ

ロンドンでアフタースクールクラブというと、親が仕事のために家に戻ってきていないので、六時頃

まで子どもたちがそこに集まり、遊んだり、宿題をしたりする場所であり、さらにいえば、学校教育という枠や年齢を越えて人と関わり、人を知り、自分を知っていく場所のことを一般的に指す。それは日本での学童に当たると思われるが、私の働いている所は障碍児のための学校ということもあって、目的や運営方法が少し違う。

まずは目的だが、働いている親のためという部分には重きを置いていなく、子どもの好きな分野、得意な分野を発揮できるようにと始められたようである。運営については、他の所は、週五日三時三十分から六時あるいは六時三十分までやっているのに対し、マナースクールは、月曜日から木曜日までの週四日三時三十分から五時三十分、月曜日と木曜日は運動、火曜日は料理、水曜日はコンピューターと決められていて、どの分野を行ないたいかをアフタースクールに参加したい子どもたちが親と相談して決め、定員八名の子ども、スタッフ三名で運営されている。また、このスタッフも、多くのアフタースクールは、学校の建物を利用してはいるものの学校からは独立しているため、独自のスタッフが働いているが、マナースクールでは、私以外のスタッフは学校で日中働いているクラスアシスタントであるのも特徴的であろう。

ある日のアフタースクールクラブ

（＊イニシャルは、子どもあるいはスタッフの名前）

いつものように、バスに乗るグループに分かれて子どもたちが集まっているホール（そこにアフター

スクールクラブの子どもたちも集まっている）に三時二十分くらいに到着すると、Nが「ボブ・ザ・ビルダー」のビデオの入った袋を、私のほうに差し出しながら、身体を恥ずかしそうに後ろに引いている。いつも、彼の二つの全く逆の思いを同時に見ることはあっても、そんなにはっきりと「これを見せたい」という思いを表現している時を見たことのなかった私は、Nの心の中で何かが構築されつつあるのかしらと嬉しく思いながら、彼に挨拶をする。長い冬休みからようやく帰ってきたというMが、旅行の話を嬉しそうにしてくる。L、D、O、S、A、今学期から新しく入ったDEにも挨拶をし、スーパーバイザーのTを待って、みんなで体育館へ行く。今日は、スポーツの日、サッカーをやりたいと口々に言っている。まずは身体慣らしに、とTがLとNに走るよう声をかける。「Run、Run、Run……」と跳びながら叫びながら、それは楽しそうに走る二人。しばらくして他の子どもたちとも交代する。黒人のOは、走るのが速い。身体を思い切り前傾にしてTがもういいよ、というまで走り続けている。DとMは体重があるせいか、途中で息を切らし休んでは、また走っている。途中で、Aが「トイレ」とその場からいなくなる。

そしていよいよサッカーの試合。スーパーバイザーのT対子どもたち。Tが「みんなが蹴る方向はこっちのゴールだよ」と何度も伝えてから試合が始まる。もう一人のスタッフのLIもいつの間にか来ていて、私と一緒に大声で子どもたちの応援。ボールを蹴りたい気持ちもあるけれど、怖くて前へ進めないDEが私の横に立っている。「ついておいで」

と誘って、私も少し参加する。何度か彼にボールを渡すが、他の子どもたちにとられてしまう。それでも、DEは楽しそうにしているので、今日はこれでいいのかなとも思う。Sはゴールキーパーの位置に立って、なんとなく、という感じでみんなのしているのを見ている。Sを見ていて、いつもこの「なんとなく」はなんだろうと思う。Aもようやく戻ってきた。彼は身体が小さい分、動きが早く、シュートを何度か決める。時々、落ち着きがないなあと感じる時もあるけれど、今日はAはすごいなあ、と感じる。しばらく試合が続いた後、みんな満足したような顔をしてアフタースクールクラブの部屋へ移動する。

部屋に入ってすぐに、絵を描き始めるN、それに続くL、A、DE。Mはおやつの準備をしているLIやTとの会話を楽しんでいる。Dは疲れたのか、ソファに寝転んでいる。テレビをつけて、子ども番組を見始めたS。Oは靴を脱ぎ始める。満足したのと、ちょっと疲れたのと、と漂っている時間。十分も経たないうちにおやつの時間となり、おなかのすいていた子どもたちは急いで手を洗いに台所へ行く。今日は、ピーナツバターかブラックカラントのジャムのついたトーストに、オレンジ、そしてクッキー。よく運動したせいか、とても静かによく食べよく飲む。

時には、おやつの後にも遊ぶ時間があったりするけれど、今日はもうバスに乗る時間になっている。彼らがコートを着て帰る支度をしている間に、コップ類を洗って私たちスタッフも帰る準備をする。少し急いでバスの所まで行く。私は毎日来ているけれど、このメンバーと遊ぶのは一週間に一度。また来週。

（ロンドン在住）

かみさまからのおくりもの

佐藤　寛子

友人と二人で表参道を歩いた。

休日に少し遠くまで出かけるのは久し振りだ。

ここのところ毎日遅くまで仕事があり、夕飯は十時を過ぎることもある。保育が終わると、職員室の机では一斉にパソコンが起動し、まるでどこかの会社に迷い込んだようだ。

子どもたちのために、と取り組んだ幼小連携の研究も、パソコンの技術の獲得と向上には十分つながったが、肝心の子どもたちへはどうつながっていくのか。前途多難である。

おそらく文化が異なるのだろう。生活まるごとを主張する幼稚園と、なんでも取り出して教えたがる小学校。子どもたちへの伝え方にはいろいろあっていいのだと、それは分かっている。幼稚園も、生活とは少し違った次元で子どもたちに伝えることが必要な場合もあるだろう。けれど、子どもたちがこの先、自分の力で自分らし

く生きていけるように、学んだことが生活に結びついていくような教育でなくては……と思うのだ。

「幼稚園では、きちんと挨拶の指導をしないのですか？」と小学校の教師に訊ねられた。

幼稚園で交わす挨拶は、「指導」なんて言葉とは程遠いもっと深い大切な行為だ。毎朝も子どもたちのいつもと同じ元気な声と表情にほっとしたり、冴えない面持ちで登園してきた人には、何かあったのかしらと気持ちをかけたり、人と人とが関わりあっていくための最初の出会いだと思う。

「ねえ、これ、いいと思わない？」

急に、友人の声がした。

せっかく気分転換に遊びに行こうと、二人で出かけてきたのに、考えることは、やっぱり仕事のことなんだなぁーと、なんだかむなしい気持ちになった。

私たちは、いつの間にか小さな雑貨屋にいた。

彼女の指差している先には、ガラスでできたしゃれたオブジェがあった。窓辺にぶら下がっているそのオブジェは、上の部分に小さな穴が開いていて、水が入るようになっている。

「お部屋の中に、虹ができるんですって！　なんだか素敵だと思わない？」

「そうね」

なんとなく気のない返事をしながら、オブジェに添えられた説明書きを読んだ。窓辺に入り込んだ太陽の光がそのオブジェを通ると、プリズムのように光を拡散させるらしい。

「お部屋にあったら、子どもたち、きっとよろこぶんじゃないかなぁ」

友人に勧められて、私はそのオブジェを買うことにした。

＊

四歳児を受け持つのは、二度目である。

心もとない感じで必死に保育者にくっついて生活していた三歳の頃とは違って、四歳になると、だいぶ人間ら

しくなってくる。からだの動きがスムーズになるにつれ行動範囲も広がって、少しだけ生きる自信のようなものが見えてくる。

言葉の吸収も著しい。昨日まで、「まぁーちゃんね」なんて自分のことを呼んでいた人が、「おれさぁー」などと友だちに話しかけているのを聞いて驚くことがある。

最近、高齢者を困らせている「オレオレ詐欺」は、四歳児の言語能力のまま止まってしまった気の毒な人の犯行かもしれない。

子どもたちの、人を傷つけるような言葉の吸収に、ついつい気持ちがいき、がっかりするようなことが多くあるのもこの時期だ。

けれど同時に、子どもたちの使う言葉にうっとりし、生きるエネルギーを分けてもらうことも実は多い。

風邪をひいて幼稚園を二日ほど休んだ。毎日遅い時間まで残って仕事をしているので、二日も休むと、ずいぶん久し振りのような気持ちになる。たまっているメールを読まなくては……と机を見ると、かわいい手紙が二つ置いてあった。

ひろこせんせいえ
おかぜ　だいじょうぶですか
ルナのおうちにあそびにきてください
おかぜがなおったらね　　ルナ

さとお　ひろこせんせい
ちゃんと　みんなとあそべたよ　　ゆか

鉛筆を握りしめて、一生懸命集中して書いている二人の様子が浮かんでくる。思いを言葉にすることが難しく、伝わらないもどかしさを抱え、いらだつことの多かった二人だった。表した文字は、優しい気持ちでいっ

ぱいだ。思いを文字で伝える方法を知り始めた喜びであふれている。

なぞなぞや早口言葉、唱え言葉が大好きになるのもこの時期らしい。

おそらく、テレビの影響だと思うのだが、クラスで「じゅげむ」が大流行した。

じゅげむ　じゅげむ　ごこうのすりきれ
かいじゃりすいぎょのすいぎょうまつ
うんらいまつ　ふうらいまつ
くうねるところにすむところ
やーぶらこうじのぶらこうじ
ぱいぽ　ぱいぽ　ぱいぽのしゅーりんがん
しゅーりんがんのぐーりんだい
ぐーりんだいのぽんぽこぴーの　ぽんぽこなーの
ちょうきゅうめいのちょうすけ

『落語絵本じゅげむ』（クレヨンハウス）は、子どもたちの大好きな本となった。私はこの本を「よんで！」と子どもたちに何度せがまれただろう。友だちの名前を覚え始め、名前を呼び合う関係がクラスに出来つつある頃だった。

呪文のように長いこの言葉が、大事な大事な一人息子のために両親がいろんな人に相談して決めた「名前」だということも、子どもたちの気持ちをひきつけたのだろう。

「じゅげむ」は、結局、クラスの子どもたち全員が覚え、みんなが集まった時間に、誰かが唱え始め、いつの間にか私も巻き込まれての大合唱になることが多くなった。早口で言ったり、小さい声で言ったり、掛け合いで言ったりと、三学期になっても、思い出すとみんなで唱えて楽しんだ。

子どもたちの、ものごとを吸収していく力は、生きるエネルギーそのものだ。そして、言葉の持つリズムや、みんなの呼吸を感じあわせて見ることを、からだ全体で

楽しむ子どもたちに、私は何度元気をもらっていることだろう。

＊

さて、表参道で買ったガラスのオブジェは、保育室の園庭に続く入口にぶらさげることにした。保育室の窓はあいにく刷りガラスになっていて窓を開けずに光が差し込む場所は、そこにしかなかった。

太陽の居場所によって、うまい具合にガラスに光が差し込むと、保育室の中は、小さな虹でいっぱいになる。ガラスが風で揺れると、床や天井の紅色の光は、そろってやさしく踊りだすのだ。

晴れた日の朝、保育室のたくさんの小さな虹を独り占めするのはもったいないと、子どもたちの登園を待ちわびた。

「わぁーきれい。どうしたのー」

「あーにじだぁー。ここにも、ここにも！」

と、予想通りの子どもたちの反応を嬉しく思いながら、オブジェを飾ることを勧めてくれた友人の、私への優しさを思った。

この日の保育は、不思議だった。

子どもたち全員が登園し、思い思いに遊び始めた頃には、虹色の光は姿を隠し、保育室はいつもの様子に戻った。

不思議なことが起こったのは、帰りの集まりの時間である。

子どもたちから突然、

「おおきな古時計がうたいたい！」

という声があがった。

彼らが三歳児クラスの時、ある男性歌手の歌いあげる「おおきな古時計」がヒットし、テレビや街中でよく耳にするようになった。子どもたちの中にも、保育中に口ずさむ人があったので、私もいっしょに歌ったり、帰りにピアノの伴奏でみんなで歌ったりした。あの時は、歌詞の意味を分からずに歌っていた人がほとんどであった

と思う。

♪おじーさんといっしょにチクタクチクタク♪

の部分になると、なんだか、うれしくなるようで、隣の人と顔を見合わせて、ニコニコしながらからだを動かして歌っていたのを思い出す。

あれから、一年。

「この歌はね。気持ちをこめて、だいじにだいじにうたう歌なの。だいじにだいじにうたうとね、みんなの気持ちが、ちゃんとお空にとどくのよ」

子どもたちは、私の話をいつになく真剣に聞き、私もとびっきり気持ちをこめてピアノを弾いた。子どもたちの歌声は保育室に静かに響いて、彼らの思いは、私にしっかり伝わってきた。歌い終わった後の、一瞬の沈黙。

「せんせい、みて！」

子どもたちの指差す床に、虹色の小さな光がひとつ、きらきら瞬いていた。

「せんせい、おそらにとどいたんだね。そらからのおくりものだ」

＊

保育が終わったあと、丁寧に掃除をしながら、今日あったいろいろなことを思い出したり、隣のクラスの先生と相談しながら、明日の教材を用意したり、お茶を飲みながら、子どもたちの様子をみんなで話し合ったりと、そんな日々を懐かしく思う。保育は、当り前のことの中に、大事なことがいっぱいあった。新しいことをすることだけが、保育の充実ではないはずだ。大事にしてきたことの意味を、もう一度考える時がきたのかもしれない。

子どもたちとの豊かな時間に感謝しつつ、力まず自然に生きていきたいと、心より思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

編集後記

Iは私のお弁当のゴマのかかったごはんを食べたいと言い、ふたくち食べました。幼稚園の先生一年目『もも組』六月の半ばのことです。

＊

入園した日から当たり前のように「せんせい」と呼ぶ子どもたちの中で、Iは担任の私を「せんせい」とは呼びませんでした。Iはエネルギーに溢れ友達とのかかわりを求める気持ちは強いけれど、うまく伝わらず、入園直後から、相手に怖い思いをさせてしまうことがありました。相手を傷つけてしまうのは本意では無いことは分かっていますし、本人なりの理由があってのことですが、実際には周りの子どもたちにとっても緊張する場になってしまいます。そこでIの傍にフリーの教諭がつくことになりました。

Iが早くに、この教諭を「○○せんせい」と呼ぶ一方、私には呼びかけないことが、Iにとっての私の存在を見直すことになりました。Iにとって私は主に何かが起こった後に登場する歓迎できない存在になっていると思いました。Iが困っている場面で一緒に考えられることや、Iが作ったものをIが達成感をもてることを共にするなど、嬉しい時間となるよう気を配りました。

＊

Iが「おかだせんせーい」と遠くから呼んでくれたのは、私のお弁当を食べてから二週間経った日のことでした。

（河合）

幼児の教育

第一〇三巻　第六号
（二〇〇四年六月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十六年六月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620東京都港区三田五―二二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

編集委員　森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（大妻女子大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

好評発売中

21世紀保育ブックス⑭

「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ

葛藤を通した子どもたちの育ち

今井和子・神長美津子　共著

今、家庭で「子どもの発達に見合った子育て」がなされることが緊急の課題であり、なかでもとりわけ子どもたちの「心を育てる」ことが必要とされています。人間としての「核」が形成される乳幼児期の子どもの内面の育ちを、豊富な事例をもとに探ります。

B6判　216頁　定価：本体1,200円＋税

21世紀保育ブックス⑮

21世紀の子育て支援・家庭支援

子育てを支える保育をめざして

伊志嶺美津子・新澤誠治　共著

保育者には、子どもを保育するだけではなく、親を支えて子どもの発達を保障し、家庭を支援していく力量が必要になってきました。本書では、カナダの事例や動き出した子ども家庭支援センターの取り組みを紹介。これからの子育て支援、家庭支援について考えます。

B6判　188頁　定価：本体1,200円＋税

既刊本

①新しい教育要領・保育指針のすべて　森上史朗　著
②新時代の保育サービス　柏女霊峰・山本真美　共著
③カウンセリングマインドの探究　柴崎正行・田代和美　共著
④子ども虐待の理解と対応　庄司順一　著
⑤知的好奇心を育てる保育　無藤　隆　著
⑥保育者の「出番」を考える　吉村真理子　著
⑦地方自治体の保育への取り組み　山本真美・尾木まり　共著
⑧乳幼児期の「心の教育」を考える　阿部和子　著
⑨自由保育とは何か　立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子　共著
⑩保育者が出会う発達問題　大場幸夫・前原　寛　共著
⑪保護者の要望をどう受けとめるか　小笠原文孝　著
⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る　吉田正幸　著
⑬子どもの健康を考える　巷野悟郎　著

〈以下続刊〉

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇三巻　第六号　平成十六年六月一日（毎月一回発行）昭和一十三年四月十五日第三種郵便物認可

いつもの保育をパワーアップする、リーズナブルなミニブックシリーズ！

最新刊

パワーアップ保育SERIES

10分でつくって60分あそべる カンタンぱわふるおもちゃ 1

田中世津子　著

牛乳パックや紙コップなど身近な素材を使った手づくりおもちゃの作り方集。やさしく短時間でつくれて、遊んで楽しいおもちゃの数々に、つくる工夫と遊ぶ工夫がつまっています。

17cm×18cm　48頁　定価：本体950円+税

10分でつくって60分あそべる カンタンぱわふるおもちゃ 2

田中世津子　著

簡単につくれて、遊んで楽しい手づくりおもちゃ作り方集の第２弾。ペットボトルやスチロールトレイ、ストローなどの身近な素材を使うなかで、考えて工夫するよろこびを味わえます。

17cm×18cm　48頁　定価：本体950円+税

こころとことばを育む ぽっかぽか手遊び・指遊び・ハンカチ遊び

斎藤二三子　著

保育者や保護者がふれあいながら子どもの心と言葉を育てる、シンプルで楽しいオリジナル遊びを紹介。子どもの発達や季節、園行事に合わせてアレンジできるヒントもいっぱい！カバーに「マジカルハンカチ」の型紙つき。

17cm×18cm　48頁　定価：本体950円+税

0・1・2歳児 赤ちゃんのスキンシップあそびとおもちゃ

木村実咲　著

園や家庭で赤ちゃんと楽しく遊ぶためのスキンシップ遊びとおもちゃ作りのアイデア集。難しく考えずに楽しみながら赤ちゃんの育ちを援助できるよう、ポイントと遊び方をシンプルに紹介。

17cm×18cm　48頁　定価：本体950円+税

以下続刊

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆